

身近なネオリベラリズムについて考える：共同研究：ネオリベラリズムの中のモラルティ

著者	田沼 幸子
雑誌名	民博通信
巻	161
ページ	14-15
発行年	2018-06-29
URL	http://doi.org/10.15021/00009103

共同研究 ● ネオリベラリズムの中のモラリティ (2017-2020年度)

ネオリベラリズムと人類学

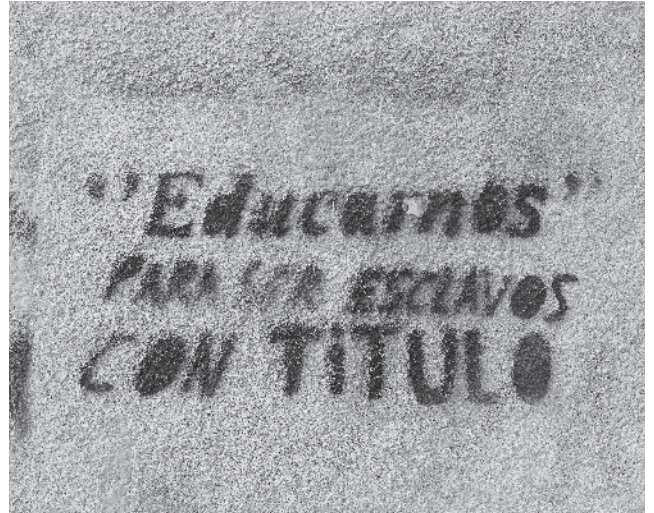
ネオリベラリズム(新自由主義)は、あまり日常生活において使われない言葉だ。しかし、日本でいえば、小泉首相在任中に掲げられた「構造改革」、社会問題として浮上した「格差社会」、近年、関心が高まっている「教育」の対費用効果と経済に関する教育の推進など、これらはすべて、ネオリベラリズムに関わっている。

この語が示すのは、大まかに言えば次の2点である。国(政治)が介入して経済の自由化を推し進めること(ハーヴェイ 2007)。そして、主体が自ら自己を統治すること(オング 2013)。ブラウン(2017)によれば、それは1970年代初期のグローバルサウスにおいては、クーデターや軍事政権、占領、構造調整等によって暴力的に推進された。一方、ヨーロッパ大西洋世界では、フォーコーの統治性の概念により近い、言説、法、主体の変容を通じたソフトパワーによって巧妙に日常生活が変えられていった。いずれにせよ、国による経済の自由化は、国境を超えた人・モノ・金の流れを促進し、「競争力」のない人やモノを、保護のないまま放り出すこととなった。放り出された人々は、その原因を国やグローバル企業の政策や無策に対してではなく、競争力を持ってない自分の責任として引き受けてしまう。今やあらゆる活動は「経済化」され、各個人は一人の「企業家」であり、自らの評価を高め、他の労働者=企業家と競い合うことが求められているためだ(ブラウン 2017: 67-68)。

人類学者は、伝統社会を調査し、記録し、それを同時代者として自らが属する社会への批判的警鐘として用いてきた。こうした立場からすれば、ネオリベラリズムは、「問題」でしかありえない。このため、この語は、分析の対象というよりは、人々の生活だけでなく、自らの学問的営為を脅威に晒す圧力を表す言葉として用いられている。日本文化人類学会の学会誌で特集「ネオリベラリズムの時代と人類学的営為」が組まれた際、序章において松田は、ネオリベラリズムと向き合う現代人類学の重



アナキズムのマーク(2017年8月、スペイン、カタルーニャ州バルセロナ市)。



バルセロナ大学近くの壁の落書き。「学位付きの奴隷にするために『私たちが教育』する」(2017年8月、スペイン、カタルーニャ州バルセロナ市)。

大な任務は、「ばらばらに分断された諸個人をつなぎ合わせ連帯を構築するための共同性」(松田 2009: 265)という第3の道を模索することだと述べ、特集で提起された議論が、次の新しい実践の母体となることを期待していた。しかし、それから9年が経った今も、「ネオリベラリズム」と「人類学」でCiNii検索をすると論文は10本、「新自由主義」と「人類学」は5本しかない(2018年3月15日検索)。

この言葉を使うことへのためらいは、それが問答無用の批判対象として措定されているためではないか。調べてみると、それは日本だけではない。“Neoliberalism”についてレビューをまとめたガンティ(2014)によれば、1970年代にチリのピノチェト政権が採用して以降、ネオリベラリズムという言葉は否定的な含意を持つようになり、今やこの語が使われるのは、それが指すものを批判するためであることがほとんどだという(Ganti 2014: 5)。2005年以降、世界的にみればネオリベラリズムをキーワードとした人類学的研究は急増した。この語が示す対象が広すぎるという警戒や批判から、分析枠組みとしての適切さを疑問視する声も多い。

しかし、ガンティはいう。これまで人類学の鍵概念となった「文化」「世界システム」等と同様、何もかもを説明するために用いれば還元論に陥ってしまう。しかし一方で、共通の分析枠組みを設けることは、地域を超えた研究へと視野を広げる機会ともなる。鍵概念に関する議論は、研究をより精緻にし、未来のための学的課題を再評価する機会となる(Ganti 2014: 100)、と。

本共同研究で試みたいのは、この言葉を単なる背景や問題としてではなく、概念としてあらためて再考することであり、先行研究の検討と研究員それぞれのフィールドデータの共有とディスカッションから、その精緻化を試みることである。とりわけ、ネオリベラリズムのモラリティに着目することによって、モラリティは、ラテン語のmores(モーレス)を語源とする。それは

集団の慣習や慣行を意味していた。そして「それらによって育まれた個人の道徳的意識、心情、態度、そして共同体の倫理的規範などを意味するようになった」(グレーバー 2016: 9 訳注)。上記の意味の広がりや多層性を活かすため、ここでは「道徳」などの和語を当てず、「モラリティ」のまま用いる。

モラリティ

ではなぜ、モラリティを題材にするのか。きっかけは、筆者の個人的な経験の積み重ねである。大学に在ると、教える側の人類学者の間で当たり前のこととして語られるネオリベおよびグローバリズム批判、それに関わる社会運動といったものが、学生に知られていないだけでなく、知っていても共感も好意も持たれていないことに気づかされる。彼らが無知だからと決めつけるのはたやすい。しかし、そうだろうか。

筆者の職場において、人類学は学生に人気のある専攻である。より明確に目的や方法論がはっきりしている他の専攻に対し、彼らが人類学に惹かれるのは、それまで表立って見えなかったり、明確に考えていなかったことを問いにしたり、趣味も含め、本当に関心のあることを対象化したりできることにあるようである。素直に「グローバル化」や「自由化」、「自己規律化」が良いと考えている彼らに対し、その負の側面について語ると、心底意外そうに驚く。しかしその驚きが、反グローバリズム運動への参入につながるかというところはならない。それは、教えている側の私も同じである。

私も、大学で教師と学生として対面するまでに、その場に立つための競争を勝ち抜いてきた。そして対面してからも、さまざまな方面における査定と評価はついてまわる。とはいえ、それらはすべて外圧による無駄なものかという、そうとも言えない。かつては大学教員になるため必要とされなかった博士論文の執筆、学生の学びを中心とした形での授業計画の立案、そうしたことは、かつてマス教育と著名人が教鞭をとることが常態化し「レジャーランド」と批判されていた大学を、研究者による教えの場にするために、必要な変化だったとも言える。かつては不透明だった評価の基準や過程が明らかになることによって、大学の就職は「出自」や「血統」でなく、本人の「アウトプット」によって決まるようになった。大学入学の「機会の平等」もしかり。ネオリベリズムの帰結と言われる自己価値の最大化や、絶え間ない評価・査定に沿った自己規律化は、人類学者も含む研究者自身が常に行なっていることだ。

皮肉なことに、グローバリゼーションとネオリベリズムの問題についてじっくり知り、読み、考える機会を持つことは、自己投資・統治のゲームに(暫定的に)勝ち残り、情報資源にアクセスでき、その収集と考察に時間をとることが可能でなければ難しい。しかしだからこそ、あらためて、ネオリベリズムがいかに、調査対象の場であるフィールドと生活の基盤であるホームにおいて現れているのかを詳細に検討する必要がある。それはかつて、グローバルサウスになされたように、有無を言わず押し付けられる側面があるのは確かだ。一方で、人々が自ら、自己統治を行うのはなぜか。冒頭で挙げたブラウンがいうように、法や言説の変容によって、あらゆる活動が経済化され、じょじょに各人が企業家であることが、あるべき姿として浸透していったためだという説明には一定の説得力がある。しかし、人のあらゆる活動の経済化と金融化が進む以前の世界に戻ろうとすることは可能だろうか。失われた安全へ戻ろうとす



「貧困(カタルーニャ語)を止める(英語)」。8月17日のテロ事件が起きる直前、この落書きが短期間に各所で広がるのが見られた(2017年8月、スペイン、カタルーニャ州バルセロナ市)。

ることは非現実で望ましくないというアパデュライ(2015)の著作を紹介しつつ、デリバティブの論理に対抗するようなもう一つの「不確実性の想像力」の構想を中川は評価し、その可能性を論じている(中川 2017)。

端からみて奇妙に感じられても、なんらかの理由があって自己を統制し、投入していこうとする人々がいるのであれば、ただ、その姿勢を誤りだと決めつけるのではなく、当事者の論理と詳細を知り、吟味することに、現状を変える突破口があるように思う。ただ、自らを取り巻く状況や背景として批判するのではなく、自らもその一部であるものとしてネオリベリズムを認識し、翻ってそれを「評価・査定」し、民族誌化し、世に知らしめることが、なんらかの変革につながるのではないか。これからの研究会で、探って行きたい。

【参考文献】

- Appadurai, A. 2015 *Banking on Words: The Failure of Language in the Age of Derivative Finance*. Chicago: University of Chicago Press.
- Ganti, T. 2014 Neoliberalism. *Annual Review of Anthropology* 43: 89-104.
- オング, アイファ 2013『《アジア》、例外としての新自由主義』加藤敦典・新ヶ江章友・高原幸子訳, 東京: 作品社。
- グレーバー, デヴィッド 2016『負債論—貨幣と暴力の5000年』酒井隆史監訳, 高祖岩三郎・佐々木夏子訳, 東京: 以文社。
- 中川理 2017「不確実性の人類学のために」『プレテクスト—ジャン＝ジャック・ルソー』(http://pretexte-jean-jacques-rousseau.org/?page=pg06_170301135239)最終閲覧2018年4月12日。
- ハーヴェイ, デヴィッド 2007『ネオリベリズムとは何か』本橋哲也訳, 東京: 青土社。
- ブラウン, ウェンディ 2017『いかにして民主主義は失われていくのか—新自由主義の見えざる攻撃』中井亜佐子訳, 東京: みすず書房。
- 松田素二 2009「序 現代世界における人類学の課題(〈特集〉ネオリベリズムの時代と人類学的営為)」『文化人類学』74(2): 262-271。

たぬま さちこ

首都大学東京大学院人文科学研究科社会人類学教室准教授、専門は文化人類学、フィールドはキューバ、スペイン。著書に『革命キューバの民族誌』(人文書院 2014年)、石塚道子・田沼幸子・富山一郎編『ポスト・ユートピアの人類学』(人文書院 2008年)などがある。